

<パネリスト報告2>

「家計と夫婦関係から見た女性が働く意味」

永井 暁子

私からは「家計と夫婦関係の視点から見た女性が働く意味」というテーマでお話しさせていただきたいと思います。働くということは、必ずでもないかもしれませんが、お金が入ってくるということです。しかし、さまざまなデータを見ても、家計にどのようにお金が入ってくるのか、トータルのは分かっても、その家計の内部でどのようなことが起こっているのかが分かるデータはあまりないのです。

現在は解散してしまったのですが、家計経済研究所という財団法人がありまして、私は初職、最初の仕事はそちらで研究員をさせていただいていました。そこには「消費生活に関するパネル調査」という1994年から、その当時の24歳から34歳の女性をスタートとして、同一個人を毎年追いかけているデータがあります。29回調査を重ねて、その都度後に続く出生コホートの人たちを追加してという調査でした。

そのデータの中になかなか家計について尋ねているものがあり、それは総務省の家計調査とまた違った形です。家庭の中に入ったお金が誰のために使われているのかという質問項目を主に使って見ていきます。また、家計の管理をどのようにしているかというデータがあるので、そういうデータを見た時にどのようなことが言えるのかという話を、働くということと関連付けてお話ししたいと思います。

では、まず未婚化についてです。やはりライフスタイル、あるいはライフコースが変容したといった時に、シングル女性が増加したということがあるかと思います。このシングルの人たちの家計に関する調査というのも、家計経済研究所で行った調査で、『季刊 家計経済研究』のほうに前に論文を書いたものから持ってきています。

ここで言いたかったことというのは、今何度もお話に出ていますように、例えば私も杉浦先生と同じ世代なのですが、私の世代というのは、積極的に結婚しない人生を選んだり、結婚しないことを想像していたりというよりは、結果として未婚だった、結果として離婚があったという形だったと思います。

現在の若い人たちを見ていると、もちろん未婚率が上昇しているということはあるのですが、予期している未婚や予期している離婚という、ライフコース上に未婚であることや離婚することというのは、ある程度可能性として織り込んでいるところがあるのかなと考えています。

それで、そのシングルの家計を見た時に、男女でかなり違いが見られます。男性のシングルと女性のシングルで経済階層も違うのではないかと、いろいろな指摘があるかもしれませんが、前に分析した結果だけで説明しますと、例えばシングル間で比較したとき男性よりも女性のほうが生命保険への加入率が非常に高いです。

これを他のデータと比較すると、男性のほうが高いのではないかとと言われるかもしれませんが、他のデータはシングルか否かの別がない集計なので、シングルに限って言うと、女性のほうが保険の加入率が、私たちがやった調査の中では高かったです。

特に、女性が常雇の場合でも、正規の場合でも非正規の場合でも、男性より高いという傾向でした。非正規の場合は特に、女性が男性に比べて高いという傾向がありました。

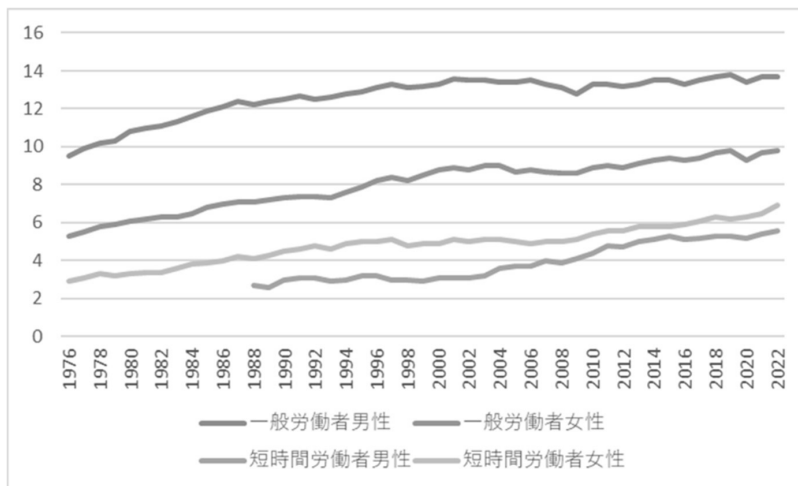
どのような生命保険に入っているかという、家族に残すタイプの生命保険というよりは、医療保障付きや老後保障、貯蓄保障付きの商品を購入していることが多かったというデータがありました。このことから、自分自身が生きていくための仕事、家計の補助のために働くというよりも、もともとシングルだということがありますけれども、自分のための仕事になってきているのではないかと、この調査データからは考えました。

また次ですけれども、今度は家計管理のタイプです。先ほど言った消費生活に関するパネル調査のデータからなのですが、これは埼玉大学の重川純子先生の分析によるもので、こちらも家計経済研究のほうに掲載されている論文からの引用です。

この表現が難しく、家計の共同化と書いたのですが、個計化の部分も少し進んでいるところもあるのですけれども、その話はすごく説明が難しいので、単純な話にしたいと思います。

やはり夫婦での共働き期間がかなり長期化していると思います（図1）。これは木本先生のグラフでも出てきたかと思うのですが、一般的に就業年数は長くなっているということです。正規雇用である程度働いて、その後も、私のゼミ生の聶さんという院生が分析するように、若い人ほど再就職のタイミングが早くなっています（聶 2023）。

だから、若い世代は間を空けずに、非正規が多いですけれども、次の就職先に行っています。そうすると、トータルで言うと共働き期間が長くなっているのではないかと思います。



出所：JILPT 集計 厚生労働省「賃金基本統計調査」

図1 就業年数の長期化

少し戻りますけれども、共働き期間が長期化することによって、家計の管理のタイプも変化しているということが言えます。昔の私の世代、あるいはそれより少し前の世代にあったような、かつ、日本の家計はこんな感じではないかとイメージされているような、夫が片働きで、夫だけ働いていて、妻がその収入を管理する、財布のひもを握るタイプというのが、日本ではすごく多かったイメージがあると思うのですが、そんなに多くはないです。

共働きの比率を見てもらえば分かるかと思うのですけれども、日本人がイメージする日本の家計のイメージにあるようなもの、妻が財布のひもを握る、要は主婦業に徹している

という家計の在り方は大体半数くらいです。半数だったのですが、それから、このデータの中でも共働きがどんどん増えていきますので、共働きで全収入一体型の割合がすごく増えていきます。

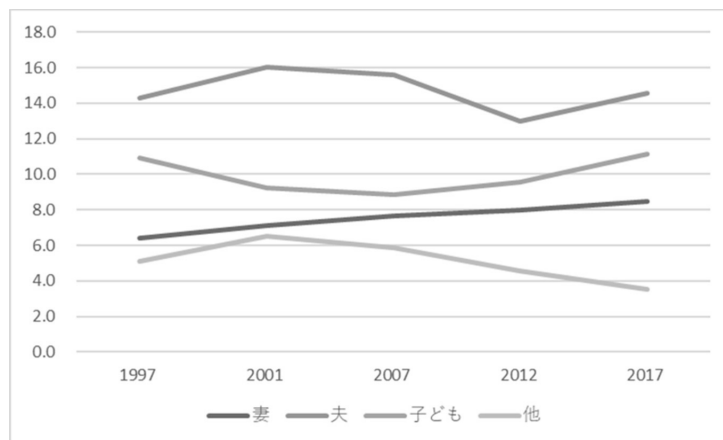
家計はいわゆる主婦が管理するというよりは、夫も妻もお金を持ち寄って家計をやっていくという、管理の仕事をしているのは妻のほうがやや多いのですが、そういう共同化の部分が見られるかと思えます。

また、いまだに男女差は大きいものの、男性の家事の時間は、昔は増えない、増えないと思っていたのに比べると、やや増えてきたというところもあります。一時期は6歳未満の子どもがいる世帯も、ずっと9分が16分で、17分だという感じで全然増えていなかったのですが、今は1時間を超えているということで、妻よりは随分少ないですけれども増えてきています。夫婦関係に共同化の兆しが少し見られるのではないかと、この家計のデータも含めて考えています（総務省統計局 2021）。

次に、では妻も含めて、お金を持ち寄って家計を運営していく世帯が増えてきたということなのですが、昔もそういう家もありました。ただ、前述の家計研のパネルデータで見てみると、結婚後、家族、特に子どものためにする支出を自分自身の貯蓄を切り崩して行い、結婚経過年数が過ぎていくと、自分自身の貯蓄がどんどんゼロに近づいていくという、まさに女性が、妻が家庭の中に埋没していく家計の様子がずっと見て取れます。なんてひどいことになっているのだろうと、データをいじりながら思っていたのですが、その傾向は一体どうなったのか確認してみました。

そうすると、28から32歳という年齢で限定させてしまったのですが、若いコホートほど世帯の支出に占める妻のための支出がわずかに上昇して、貯蓄が横ばいで、夫は低下しているのと同じ割合になってきているということです。

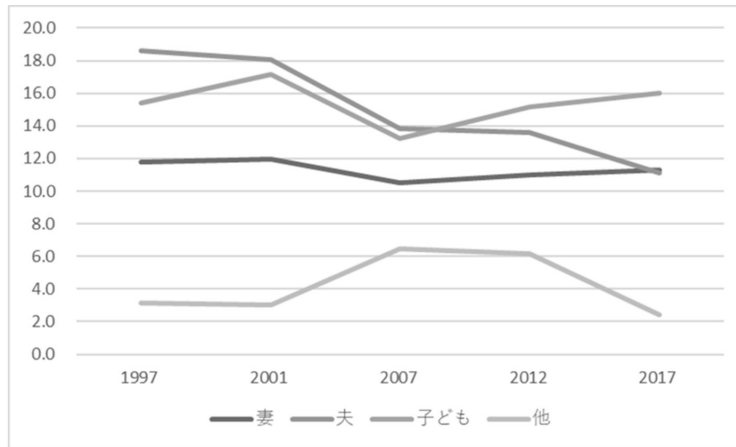
ただ、1か月の家計支出に占める世帯のための支出を見てみると、共通支出のところが一番大きいのでそれは除きますが、夫が多いながらも、あまり増えていないのに比べて、わずかですが妻が少し上昇傾向にあります（図2）。だから、妻の支出を削るという方向には行っていないで、やや増えているということです。



出所：「消費生活に関するパネル調査」データを永井が集計

図2 1か月の家計支出に占める世帯員のための支出

では、預貯金について、妻が家計の中から妻のための預貯金に増やす割合は変わっていないのですが、夫に回す預貯金は減少してしまっていて、夫と妻がほぼ同じくらいになってきています（図3）。



出所:「消費生活に関するパネル調査」データを永井が集計

図3 1か月の家計からの預貯金に占める世帯員のための預貯金

そのことから、自分自身のための支出や預貯金の増額は、働くことによって徐々に増えてきているのではないかと考えます。つまり、主婦として働くというよりは、自分のための労働の要素が多少見られるのではないかと考えました。以上です。

参考文献

JILPT「早わかり グラフでみる長期労働統計」

(https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/timeseries/html/g0213_01.html 2023年11月28日取得)

永井暁子「現代日本における未婚者の特性と経済生活」『家計経済研究』110号 8-23, 2016.

——「家事と仕事をめぐる夫婦の関係」『日本労働研究雑誌』62(6), 38-45, 2020.

——「家事・育児・介護を誰と分担するのか」『労働調査』(622) 10-13, 2022.

聶逸君「人的資本と既婚女性の再就職タイミングー「消費生活に関するパネル調査」データを用いてー」『女性とキャリア』15号, 77-88, 2023.

重川純子「夫妻間の家計管理タイプの変化」『季刊家計経済研究』114号 38-47, 2017.

総務省統計局「令和3年社会生活基本調査 生活時間及び生活行動に関する結果 結果の概要」2021. (<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2021/kekka.html> 2023年11月28日取得)